

ここは富水 すどう美術館の新しい活動の場
ほとんど水が湧くようにアートも湧めども尽きない希望が湧いてくる
水はわたしたちになくはならないもの「AQUA」が誕生する

2012年3月発行 26号 すどう美術館
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373
TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739
info@sudoh-art.com
http://www.sudoh-art.com

グアダハラ・ノート 山口敏郎

「今日は寒すぎてほとんど人が来ないかも知れないな。」とグアダハラ画廊のオーナーのハビエルが言った。「そんなこともあるまい。」と私は答えたが、内心そうかもしれないと思った。2012年2月2日、この冬一番の寒さで通りには人の姿が見えない。しかしオープンしてみると何のことはない。三々五々つぎつぎに人が入ってくる。さらに一様に熱心に作品を見てくれる。若い美大生らしき若者たちも特に念入り何かを吸収するように見入っている。デッサン愛好家、建築家、精神科医、もちろんアーティストも含め色々な人が多くの質問を投げかけてくる。「どれも繊細で心のこもった作品だ!」と誠心誠意言ってくれたよ。感激で目がうるんだね。こんなことはマドリッドでの展覧会では有り得んね。みな手にワイン、作品は背にして、作家であれば「近頃はさっぱり売れないね。」的な近況報告を、ある者は政治経済の話をと、まるで展覧会の

ことはそっこのけだ。グアダハラは首都マドリッドに隣接する県で、各駅停車でもたった1時間の至近距離にある。しかしこの反応の違いはなんだ。そういえば、私がマドリッドにやって来た30年前、マドリッドが正に今日のグアダハラ画廊での様相を呈していた。私も熱心に老舗の現代美術の画廊をめまぐるしく回り、新しい動きを吸収して行った。画廊主も時が経つのも忘れ熱心にアートの話をしてくれたものだ。そうした画廊もどンドン減り、資本をもった企業画廊が入りこんで来るに従い、画廊主と客との関係も薄れちゃった。それはちょうど以前あった街の小さな商店が大型スーパーの誕生と共に消えて行ったのと重なるな。魚屋、八百屋をはじめほとんどの日常品は歩いてすぐのじいさん、ばあさんなんかやってるショボい店に買いに行っちゃった。そこでは主人と客との間に色んな話

が生き生き飛び交ってうるさいのなんの。もちろん主人はその道のプロで、自分が売っている「もの」に関しては悔しいほど何でも知っているんだ。色々アドバイスをしてくれてこちらは助かり、同時に言葉も覚えて行ったものだ。大型スーパーができ、そこにはきれいに包装され、マーケティングの結果絶対多数の人が好む「商品」が何でもそろい、人々は無節操にも自分に流れて行った。そんな所に本当に自分の好みに合って、作った人の気持ちが伝わる「もの」があるはずも無く、またそんなことは売る方も買う方もどうでもよくなってきたんだろう。会話も無いしね。最近の大手ギャラリーも同様に、マーケティングされた「商品」が並び、画廊主の姿も見えず、アシスタントが奥でパソコンを打ち、携帯でコレクターにコンタクトを取っている。アート・フェアはそうした「商品」の見本市で、最新のモデルが提示され、ギャラリストたちはそれらを参考に次の戦略をねり、一般客は、目が回るほど多く並べられた「商品」を探し、自分に好みに合った「商品」を買って来る。その「好み」すら、業界によって操作されているんだよ、新しい携帯の最新モデルのように。

本来、個人の内にある感覚質といったものを掬い上げ、それを丹念にたどっていくことによってのみ多くの人の心を動かす創造的作品が生まれる筈だ。今回のグアダハラ画廊での展覧会で得たものは多く、そういう意味で私が一番楽しませてもらったよ。みんなありがとう。これからも「商品」は作らないで、ショボくてもいいから手作りの「もの」を作って行こうよ。

2012年2月6日、タピエスが死んだ日に

点描

こんな話でよかったです (13) 仙仁司

富士山て？
富士山ほど人々の心を惹き付け続けている山はない。日本画、洋画を問わず、どれほどまで多くの画家が圧倒的に美しい姿に心をくすぐられてきたらどうか。画商は抽象画の作家にさえ富士山を描くように持ち掛けるという。銭湯の浴室いっぱい描かれる国民的な山ではあるが、さて富士山を描いた名画はと言われると、なるほど、誰が見ても富士山の姿には間違いはないのだが何か収まり過ぎていて厭味を先に感じてしまうのは何故だろうか。いくら作品の前に立ち居ても観る者を呼び込む実感が無い、リアリティが見えてこないのだ。
これまで見聞してきた作家の中で3人の名を挙げたい。葛飾北斎(1760~1849)、富岡鉄斎(1836~1924)、深沢省三(1899~1993)。北斎と鉄斎については言及はしないが、深沢省三については未見の方が多いと思うので紹介したい。優れた素描力を以て21才から「赤い鳥」に多くの挿絵を描き、戦後には市民デッサン教室、児童対象の日曜図画教室、若手大学教授として若手県的美術教育発展に寄与し、昭和40年からは居を東京に移しキンダーブック等の挿絵を描き、本格的に富士山を描き始めたのは山中湖に別荘を構えた昭和53年79才からの約15年間であった。深沢さんの視力と体力は晩年まで衰えることはなかったが、その眼を富士山に向け続け観察し、そうして得た富士山を画き切った。
気温を描き、風の変化を描き、見る人を夏の富士山に厳冬の富士山に誘い込んだ。
富士山のリアリティを描写し尽した最初の画家だと思ふ。

すどう美術館の活動

すどう美術館館長 須藤一郎
すどう美術館では館内での展覧会を継続して開催しております。質の高い作品の展示を目ざして、企画を進めていきます。公募で行なう「若き画家たち」のメッセージ展は、今年度は七月七日(土)から二回、十五日(日)まで開催予定です。若き作家の応募も、この機会を期待しております。ご推薦いただきたく思います。昨年の東日本大震災で被災された方々の心に、芸術活動をとって生きる勇気と希望を届けたと、東日本本気で立ち

プロジェクトの活動は被害の大きかった岩手の山田町、大槌町に焦点を置き、昨年夏に現地に行き、実情の視察と両町の行政担当者との打ち合わせを行なったこと。その後、二つの町にボランティアの人手を添えて湯たんぽを五十個ずつもお送りしたり、大槌町に子ども向けの絵本を皆ささんか送りしたりの活動を続けています。
このたび、両町と日程を調整し、四月二十七日から五日まで、最初に山田町、次いで大槌町で展覧会、ワークショップ、コンサートを行うことが決まりました。具体的準備を進めるために、二月、副館長が大槌町で被災された松井カヨさんともにあられた実施する会場の確認と打ち合わせのために、両町を訪問してきております。状況に「また、昨秋に行なった「西湘地区アーティストインレジデンス」で国内外十二名のアーティストによって作られた作品については、小田原の清閑亭、南足柄市の文化会館、そしてすどう美術館に巡回展示をさせていただきますが、その節ご協賛いただきました箱根湯本、天湯治郷からご希望があり、湯治郷内のギャラリーでも展示を行なうことになりました。
なお、次のアーティストインレジデンスについては来春から秋の間に行なうこととし、関係者のご意見もお聞きしながら、より良いレジデンスになるよう検討を続けています。



白いノット
休載します

